

## 1. 背景とねらい

県北地域を中心に作付されている本県初のオリジナル品種「かけはし」は、本年の不順な天候にもその耐冷性を発揮し、不稔の発生も他の品種に比べ少なく安定した収量が得られた。

品質面では、主要栽培地域である県北地帯の1等米比率は55.0%で平年を大きく上回ったが、他の地域との差は依然として大きく、その中で「かけはし」の1等米比率は他の品種をやや下回る結果となった。

そこで、「かけはし」を中心とした本年の水稻の生育・登熟経過及び玄米品質の特徴を明らかにし、品質的に1等米比率を高め得る栽培・調製技術に関する知見が得られたので、普及指導上の参考に供する。

## 2. 技術の内容

### (1) 平成8年産「かけはし」の品質の特徴

ア 「かけはし」の主要栽培地域での落等要因の第1位は「青未熟」で、その割合は39～51%と高くなっている。その中で、本年産の「かけはし」についても地域全体と同様の傾向が見られ、落等要因の第1位は「青未熟」(約37%)であった。

イ 本年は全体に粒厚が厚く、1.9mm篩でも青未熟粒が混入し、整粒歩合が低下した。

本年は県北部を中心に初期生育の遅れによる茎数不足の影響で、適正な穂数が確保できない事例が多く見られた。そのため、単位面積当たり粉数の減少及び登熟期間後半の好天により玄米千粒重が増加し、粒厚も例年より厚くなったことによる。

ウ 本年は分けつ期の6月中・下旬の気象が低温で経過し、分けつの発生が長期間に渡って続いたことが出穂のばらつきにつながったと考えられた。

更に、本年の登熟初・中期(8月中旬～9月上旬)の気象は低温少照で経過し、登熟は緩慢に推移したため、青未熟粒割合は登熟後半までかなり高かった。

登熟後半には好天のため青未熟粒は急激に減少したが、既に玄米化した籾と、後半に玄米化した籾との熟度の差が大きくなった。そのため、青未熟粒と茶米が混在する場合も見られた。

### (2) 品質向上のための対策

ア 「かけはし」は生育初期の分けつが旺盛で、比較的穂数の確保しやすい品種であるが、分けつの発生・揃いを良くするために揃いの良い健苗を移植することが重要である。

また、本年は圃場内での生育ムラが大きく、水口と圃場中央・水尻の出穂差は、県北部・山間地では10日～2週間程度見られた。気象条件的に厳しいこれらの地域では、昼間止水灌漑やポリチューブの使用などにより水温の上昇と均一化に努め、生育差を最小限に抑える水管理が必要である。

イ 穂数が不足すると二次枝梗への着粉が多くなり登熟歩合が低下し、かつばらつきが生じやすくなる。

また、本年のように単位面積当たり粉数が少なくなると玄米千粒重が増加し粒厚も厚くなり、1.9mm以上の粒厚帯に未熟粒が残りやすくなる。生育診断基準の適正範囲である30~34千粒/m<sup>2</sup>の単位面積当たり粉数を確保するためには、470~530本のm<sup>2</sup>穂数が必要なので、疎植を避け22株/m<sup>2</sup>程度の栽植密度を確保すること。

ウ 「かけはし」はその品種特性として粒が大きいことから、1.9mm篩での調製が必須である。

上記の対策に沿った栽培が行われ、適正な玄米千粒重(22.5g前後)が確保されているものについては、1.9mm調製で十分な玄米品質が得られる。

また、本年のように穂数・粉数不足により玄米が過大に肥大したり、登熟がバラついた場合でも、篩目を大きくすることにより青未熟粒や死米、奇形粒等が除去され、整粒歩合を高めることができる。

### 3. 指導上の留意事項

(1) 「かけはし」の刈取り時期の指標については、登熟積算気温で950~1050℃の範囲内とするが、「かけはし」は「早生の早」で熟期が早く、日数的に適期幅が狭くなるため刈取りの判断が難しい。そのため、現場で簡易に判断できる刈取り指標について今後検討を重ねる予定である。

### 4. 試験成績の概要

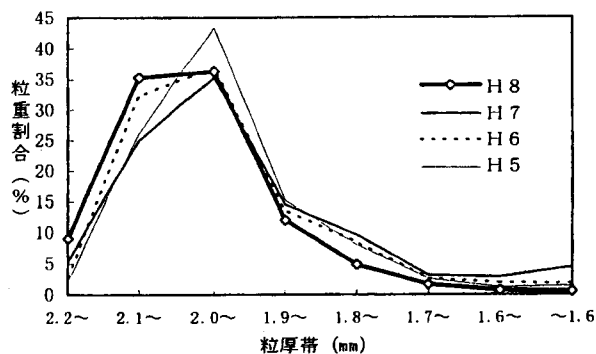


図-1 粒厚分布 (本場作況：稚苗かけはし)

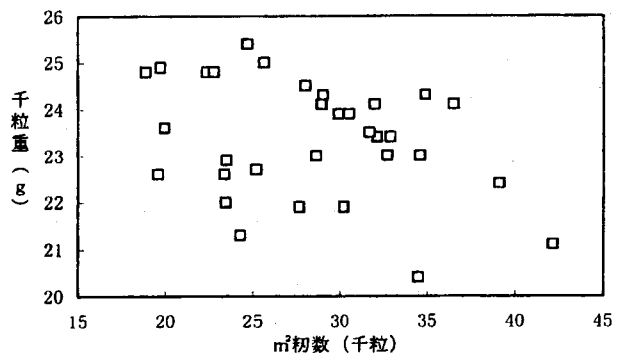


図-2 m<sup>2</sup>初数と千粒重(1.9mm)の関係(H8生育診断圃・モデル展示圃)

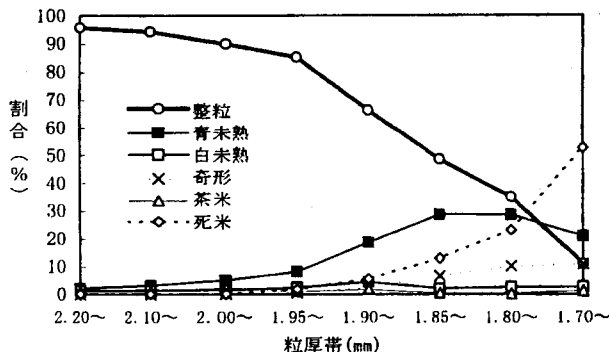


図-3 粒厚帯別玄米品質 (H8本場：作況かけはし)

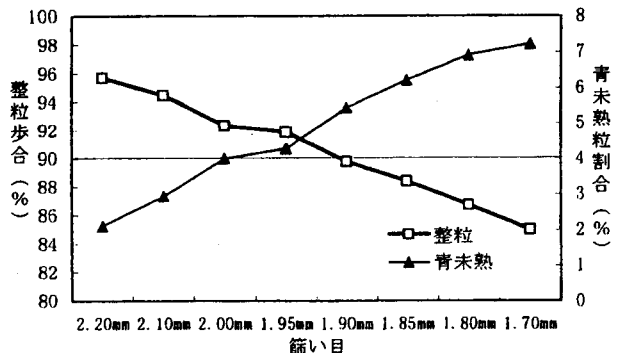


図-4 篩目別整粒歩合及び青未熟粒割合 (同左)